

## エスペラント朗詠短歌通信添削 (11)

前田茂樹

### エスペラント朗詠短歌募集要項

- 1、一人二首まで
  - 2、匿名可
  - 3、テーマ自由
  - 4、日本語で短歌の意味、もしくは原文の日本語の短歌を添える
  - 5、あて先 ノーバ・ボーヨ編集部  
〒 621-8686 京都府亀岡市天恩郷大本本部内  
FAX 0771-25-0061 e-mail officejo@epa.jp
  - 6、作品は添削後誌上で発表
  - 7、締切り 毎月15日までにお送りください
- 

### 作品 A

De l' Uta-altar'  
deklamas ĉe gejunuloj  
ja en Esperant' ;  
progresi final-ariad'  
noble uta' Majstrin' .

<解説> まず拍子から見ていきましょう。二行目と四行目がともに八音節で、一音節多く、最後の五行目が六音節で、一音節少なくなっています。エスペラント朗詠短歌において音節の数(三十一音節)は最も大切な条件です。一音節の多少で拍子が狂い朗詠に支障をきたします。日本語と異なり、エスペラントの朗詠短歌は、強弱の規則正しい連なりによって成り立っているからです。

詩句が拍子（強弱のリズム）と音節の数に極端に束縛される朗詠短歌では、前置詞の使い方が作品に大きく影響を与えます。

この作品の一行目 de l' uta-altar' は、原文〔日本語〕によれば「歌垣の前」とありますから、前置詞は de ではなく antaŭ もしくは ĉe であるべきでしょう。ただ、antaŭ を使うと Antaŭ la altar' utaa と八音節になり、utaa が二行目にくい込み、二行目三行目まで大きく影響してしまいます。二行目の deklamas ĉe gejunuloj の前置詞 ĉe は gejunuloj が主語となるため不必要。また、歌祭りの朗詠のような場合、「朗詠する」は deklami より reciti か ĉanti のほうがよい。ただし、大本では、「祝詞を奏上する」は recitas preĝvortojn と表現しますので、筆者は、朗詠の場合、祝詞と区別する意味で ĉanti を使うようにしています。

さて、四行目と五行目ですが、それぞれの品詞が文法的に機能していないため、なんとなく意味は理解できますが、それぞれの語の概念が調和した正確な文章となって伝わってきません。

一行目から三行目までは、「歌垣の前で、青年たちがエスペラントで朗詠している」というのが詩句の内容でした。ここから四行目の progresi final-ariad'、五行目の noble uta' Majstrin' と繋がってゆきます。四行目は、前後の詩句から、la ĉantado jam atingis la finalan arion, そして五行目は、nobla utao de Majstrino と解釈できます。

この作者の意図するところを踏まえると、一行目は、Ĉe l' utaaltar'、二行目は、deklamas gejunuloj、三行目は、ja en Esperant'；となります。が、最後の punktokomo (;) は後に繋げてゆく詩句の妨げになりますから削除します。というのも、この punktokomo があることによって、前半の一行目から三行目の詩句つまり「エスペラントで朗詠される」のが教主さまの御歌であるという内容に辿りつくことができないからです。四行目と五行目では、

(作者の日本語の説明にあるように) 教主さまの御歌が斉唱歌であるということも示さなければなりません。

参考例

Ĉe l' utaalтар'  
ĉantistoj junaj ĉantas  
ja en Esperant'  
Utaon Unisonan  
dignoplenan de Majstrin' .



作品 B

Posto Utafest'  
de pluvas Kamejama  
fulmotondri ho!  
kun amikoj pasas terur'  
preĝi vesper' la diec' .

<解説> まず一行目の posto Utafest' は、post la Utafesto と前置詞句にしなければなりません。二行目の de pluvas Kamejama は、多分 ekpluvas en Kamejama のことと思いますが、en Kamejama とすると八音節になり一音節多くなってしまいます。かと言って前置詞を省略することはできません。三行目の fulmotondri ho! は、このままの表現ですと前二行の詩句とは文法的整合性がなくなってしまい、文章として成立しません。したがって、Post la Utafest' / ekpluvas kaj fulmotondras/ en Kamejama と二行目と三行目を入れ替えるなどして文章として成立させなければなりません。作品 A の四行目の progresi、この作品 B の fulmotondri などの時制のない

動詞不定法の使い方は、文章の流れを止め、詩的な情趣まで消してしまうことがありますので要注意です。動詞を不定法で使う場合は、povas -i, devas -i, por -i, sen -i など、一般的な規則に添って使うことをお勧めします。他に使い方がないわけではありませんがここでは説明を控えます。

四行目と五行目は、作品 A と同じように、各語の文法的機能と各語間のつながりが脆弱であるため、意味が分かりにくくなっています。そのうえで、まず前半の一行目から三行目までの詩句からの文章的つながりを確立するため、四行目以後の内容を確認しておきましょう。日本語の作品によると、「歌祭りの後、亀山（花明山）は夕立に見舞われ、激しい雷鳴が轟きわたる。恐怖を感じながら友と夕立が過ぎるのを待つ」という内容。ただ、このあと「祈る夕べの神々し」と締め括られていて、これが夕拝におけるものなのか、夕立が過ぎ去ったあとの感想なのかは定かではありません。いずれにしても最後の二行の中にこの詩想を押し込むことは困難かと思われます。また、沢山の詩想を表現することが良い詩を作ることでもありません。しっかりした主役とよい脇役のコンビネーションが大切だと思います。ということで、四行目と五行目は、この作品の詩句とはかなり異なったものになりますが、以下に参考とさせていただきます。最後に、韻文の創作には、このエスペラント朗詠短歌に限らず、正しい文法の知識が大切であることを付け添えておきます。

#### 参考例

Post la Utafest'  
pluvegas kaj fulmtondras  
en Kamejama;  
atendas mi la ĉeson  
kun amikoj, kun timem' .